令和７年度 発信型英語教育拠点校事業　～宮城県角田高等学校～

課題・テーマ

小中高における言語材料の系統性をふまえた指導

⇒本校新入生の多くが、小中学校教科書に掲載されている言語材料や語彙について、ほとんどあるいは全く定着が見られない。ただし、小中高の英語授業全体をとおして、少なくない学習事項が共通しているため、系統性を整理・理解することにより既存の知識を活性化したり、より有機的な知識の結びつきを作ったりすることで、学習効果を高めることができると考え、課題として設定した。

具体的な取組と工夫

■地域の協力校（角田小学校・角田中学校）の授業に希望者がチューターとして参加　※（別紙資料1・2）

角田小・・・守りたい絶滅危惧種についてのスライド発表をサポート

角田中・・・自分がヒーローだと思う人物について、「話すこと（やりとり）」「書くこと」のサポート

■他校種英語連携実践校への視察（ドルトン国際高等学校、福島県立ふたば未来高等学校、福島県立原町高等学校）

特に、原町高等学校については、本校と学校規模が同程度であり、他の事業と連携させて地域の小中学校との英語授業をとおした交流も行っているため、取り組み内容が非常に参考になった。また、授業における指導方法にも連続性・系統性を持たせており、今後さらに連携を発展させるうえで有益であった。

■公開研究授業及び研修会（外部講師：敬愛大学　向後秀明　先生）

最終的にアウトプット活動につなげるために、どのように「読むこと」の指導を行うか（2技能以上の統合的な言語活動）に焦点を当てて公開研究授業を行った。昨今、発信の面に重点が置かれがちであるが、読んだり聞いたりしたことを活用して発信活動を行うためには、逆算していかに「読むこと」「聞くこと」の活動を構成するかが重要であると再認識した。また、今年度も向後先生にお越しいただき、「英語授業の“あるある”を見直す－言語活動の質的向上を目指して」の演題で、言語活動の適切な在り方について御教示いただいた。

■言語活動・パフォーマンステストの実践例のアーカイブ化　※（別紙資料3）

小中高、それぞれの授業の中でうまく機能した言語活動やパフォーマンステストの概要を同一様式に落とし込んでアーカイブ化し、アイディアを共有することにより言語活動を充実させる。（今年度行った活動を格納するところからスタートとする予定）

成果

■「書くこと」が苦手な生徒の割合　41.9%（R7. 5）→ 39.3% (R8.2)　　2.6pt. Down↓

「話すこと」が苦手な生徒の割合　37.1%（R7. 5）→ 32.1% (R8.2)　5.0pt. Down↓

「読むこと」が苦手な生徒の割合　16.1%（R7. 5）→ 23.2%(R8.2)　7.1pt Up↑

→考察①年間を通して、発信技能に関わる活動や評価を多く行ってきた影響が発現している可能性がある。

→考察②英文の言語材料および内容の高度化に負担を感じる生徒が増加している可能性がある。

■「英語を得意と感じるか否か」×「何の力を伸ばしたいか」のクロス分析（R8.2のデータより）

「得意・やや得意」層：「話すこと」伸ばしたい33.3%/「書くこと」伸ばしたい33.3%

「苦手・やや苦手」層：「話すこと」伸ばしたい54.5%/「書くこと」伸ばしたい18.2%

→考察③英語が苦手な生徒も、「話すこと」の活動には意欲的に取り組める傾向。

課題及び改善案

■「話すこと」「書くこと」に関する生徒の意識の変容について、やや伸びが鈍かったため、帯活動等をとおして表現の幅を広げるよう指導し、「できた」実感を高めていくことに課題がある。

■受信技能と発信技能を統合した言語活動を行う中で、資料を読み取ったり、必要な情報を探したりする受信技能も同時に育成していくことに課題がある。

■英語に対して苦手意識を持つ生徒は「話すこと」に関しては動機づけが高いため、「書くこと」へのハードルを下げるために、「話すこと」から「書くこと」へ展開する言語活動を開発していくことに課題がある。

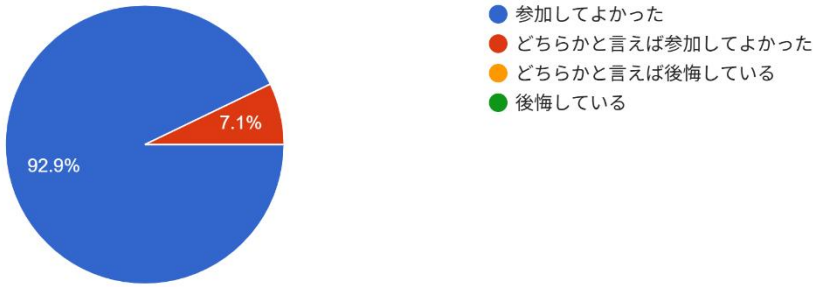
（別紙1）　角田小学校との連携（3クラス実施）

1　取組みの概要

小学校外国語科の授業に、高校生がチューターとして参加した。目的は「小中高の学びの接続」「高校生の学びの深化」「小学生の英語学習意欲向上」である。

2　高校生の参加満足度

今回の取組みに参加してみての感想を教えてください。
14 件の回答



3　高校生の気づき・学びの傾向（自由記述より）

・コミュニケーションについて　⇒　小学生も高校生も緊張しており、高校生側から積極的に声をかける必要性を感じている。
・指導の難しさと工夫　⇒　２人同時に見る難しさ、説明の言い換えの必要性など、“教える側の視点”を体験した。
・小学生の力への驚き　⇒　「小学生の英語力が思ったより高い」という記述が複数見られた。
・自己成長の実感　⇒　英語で話す場面での緊張が軽減した、発表に慣れた、伝えることで自分の理解が深まった等。

4　取組みによる効果

・小学生側への効果（推測を含む）
　年齢が近いロールモデルにより、英語への心理的ハードルが下がる。
　継続的な言語接触の中で、自然な英語使用場面が生まれる。
・高校生側への効果
　学習者→指導者という視点の転換により、理解の深化が見られる。
　対人対応力（声かけ・場の雰囲気づくりなど）が育成されている。
　将来の進路（教員・福祉・対人支援系）との関連づけが可能。

（別紙2）　角田中学校との連携（2日間　4クラス実施）

1日目振り返り（自由記述より）

① 指導面に関する課題
・中学生にわかりやすい英語・単語を使いたい
・英文の意味や伝えたい内容をもっと丁寧に説明したい
・相手が自力で書けるような支援を意識したい
・ゆっくり、聞き取りやすく話したい

② コミュニケーション面の課題
・自分から積極的に話しかけたい
・笑顔で接したい
・ジェスチャーや視線を意識したい
・人に伝える難しさを感じた

③ 自己成長への意識
・自信をもって話したい
・iPadに頼らず話せるようになりたい
・英語力をもっと高めたい
・明るく前向きに関わりたい

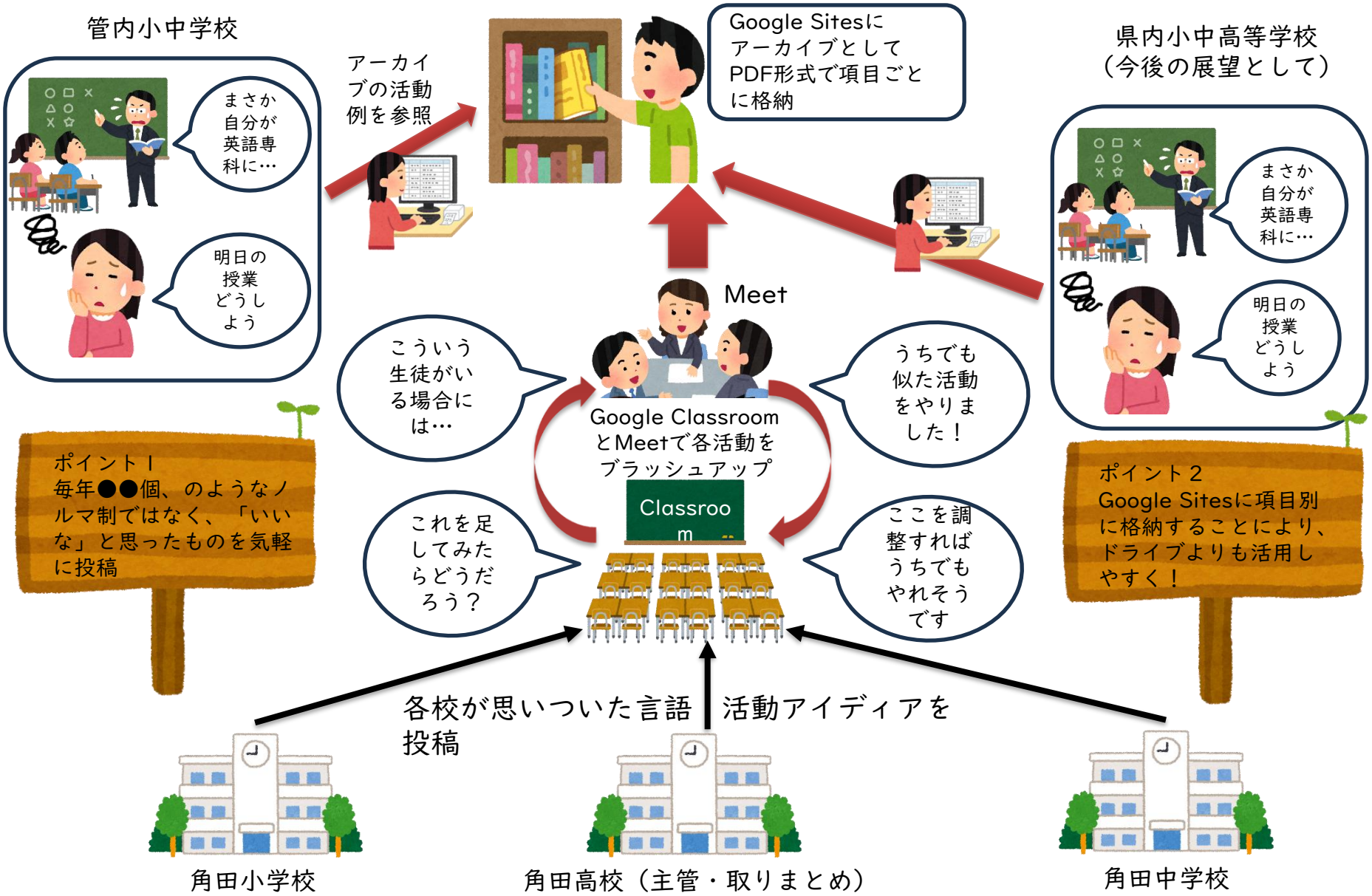
「わかりやすく伝えること」「積極的に関わること」「自信を持つこと」を中心に、自己改善への意識が高まった。

2日目振り返り（自由記述より）

① 指導力の向上
・必要な部分だけを教えることができた
・噛み砕いて説明できた
・覚えやすく工夫して教えられた
・中学生の理解に合わせて対応できた

② 積極性・対話力の向上
・自分から話しかけられるようになった
・会話の回数が増えた
・質問を多くするようになった
・コミュニケーションが活発になった

③ 態度・雰囲気の改善
・笑顔で話せた
・優しく接することができた
・落ち着いて話せた
・緊張せずに関われた
・目を見て話せた
・ポジティブな声掛けを増やせた

1日目に挙がっていた課題の多くが、2日目には具体的な「成長」として表れている

（別紙３）　Kakuda言語活動アーカイブ（仮）　イメージ